

「ふるさとの商業を活発に」 中国への新航路を開いた事業家

みなみじま まさく
南嶋 間作



教師から回船業へ

南嶋間作さんの人生が大きく変わったのは、26歳のときでした。

東京の大学を卒業し、ふるさとの新湊にもどってきた間作さんは、教師として力を尽くしていました。ところが、突然、お父さんが亡くなったのです。間作さんの家は、回船業を営んでおり、当時、北前船と呼ばれる和船で、米や肥料などの物資を運んでいました。

「今日からおまえが、家業を継ぐのだ」

間作さんは、お祖父さんの言葉にとまどいました。自分の一生を教育に捧げたい。しかし、家の仕事を放っておくわけにはいかない。悩みぬいた末に、間作さんは決意しました。

「これが、私に与えられた運命なのだ。やるからは、全力で取り組もう。回船業がもつともつと発展



これからは、大型汽船の時代だ。
大型汽船を購入し
海外航路を開いて
伏木港を活発にしたい。

能三さんが開いた伏木港を、間作さんは発展させたんだね。



間作さんは、どうやって中国への航路を開いたのかしら？



南嶋間作さんは、前のページで紹介した藤井能三さんの、17年後に生まれた人だよ。



西暦	年齢	
1863年		射水郡放生津町(現在の新湊市)に生まれる
1883年	20歳	慶応義塾で政経学を学ぶ
1886年	23歳	新湊町立卓立小学校・廉貞小学校の校長を務める
1889年	26歳	教師をやめ、家業を継ぐ
1890年	27歳	上海に渡り、海運事情を調べる。その後、新湊に戻り、南嶋商行という会社をおこす
1891年	28歳	ドイツ製汽船「チャイナ号」を購入し、「奈古浦丸」と名付ける
1894年	31歳	「志賀浦丸」と「有磯浦丸」を購入する。中国への定期航路(廈門港)を開く 新湊汽船会社をおこす
1899年	35歳	亡くなる

南嶋間作さんの三十二年表



奈古浦丸と間作さん。
新湊市立放生津小学校6年
多胡夏純さん

するように力を尽くそう」
しかし、これから家業の回船業を継いでいこうとする間作さんにとって、衝撃的な出来事が起こりました。
親せきのおじさんが経営していた北前船の商売が失敗し、倒産したのです。

当時、新湊のほとんどの回船業者は、小規模な和船を使っていたので、大型汽船をそろえている日本郵船などの大会社には、とても太刀打ちできず、倒産する会社が数多くありました。

「まず、大型汽船を使う商売のやり方を、学ばなければならぬ」

間作さんは、大きな決意を胸に抱いて、上海へと向かったのです。

大型汽船を購入したい

北前船による回船業の時代は終わった。これからは、大型汽船の時代なのだ。

大型汽船を使った商売の方法を学び、新湊に戻った間作さんは、二つのことに挑戦しました。一つは、大型汽船を購入すること、もう一つは、海外航路を獲得することでした。

当時、政府は、外国との競争に勝つために、大会社にだけ手厚い援助と保護を与えていました。このため、間作さんには、政府からの援助はありません。



間作さんが初めて購入した大型汽船「奈古浦丸」。



「奈古浦丸」を購入したときの記念写真。前列の一番左が間作さん。

間作さんは、親せきや同じ回船業者をまわって、大型汽船を購入するための資金を出してくれるよう頼みました。さらに、大阪の豪商・阿部彦次郎さんという人に会って、協力をお願いしました。

「大型汽船を購入して、定期的に物を運ぶための航路を開きたいのです」

「よし、君にかけてみよう。お金を貸そう」

「ありがとうございます。力の限り、がんばります」

間作さんの情熱、先を見通した考え、強い決意に、阿部さんは心を打たれたのでした。

間作さんは中国に渡り、大型のドイツ製汽船「チャイナ号」を購入し、「奈古浦丸」と名付けました。

奈古浦丸が新湊にやってくると、今までの小さな和船とは比べものにならないくらい、大きくりっぱな汽船の姿に、新湊の人々は驚きました。

「この船の姿に負けないくらい、大きな商売をするぞ！」

マストを見上げる間作さんの心は、これからの商売にかける決意でいっぱいでした。

海外航路の開拓へ

よし、次は、外国へ物を運ぶための航路だ。

間作さんは勇気と情熱をもって、新しい航路を切り開くことに挑戦しました。

当時、海外への航路は、日本郵船などの大会社が独占していました。それに対して日本各地で生まれた小さな海運会社の船は、社外船と呼ばれていました。間作さんは奈古浦丸に続き、志賀浦丸と有磯浦丸を購入し、社外船として、中国・廈門港との間を定期的に往き来することを実現させたのです。

それまでの社外船で、大阪と朝鮮半島（仁川・釜山）を結ぶものはありましたが、中国との定期航路

に乗り出したのは、間作さんの船が全国で初めてでした。

間作さんは、大会社との競争に負けないように、知恵を絞りました。

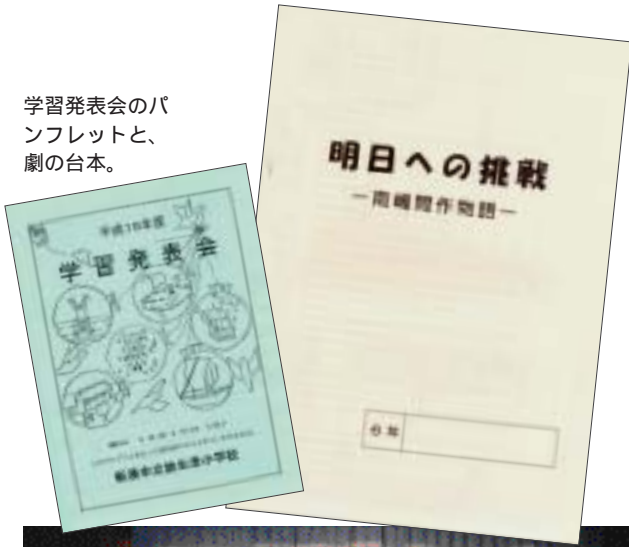
「そつだ、いろいろな港に寄るようにすれば、もっともつと利用しやすいはずだ！」

当時、大会社の定期航路は、決まった港にだけ寄るといふ仕組みでした。それに対して、間作さんは荷主から頼まれれば、どこへでも寄港することにしました。

そのやりかたは、利用する人々にとても喜ばれ、間作さんの事業は、どんどん大きくなっていきました。しかし、間作さんは、外国にばかり目を向けていたわけではありませんでした。

日本海沿岸では、小さな汽船のほうが小回りがきくことに目をつけて、北前船ほどの大きさの汽船を

学習発表会のパンフレットと、劇の台本。



学習発表会で、新湊市立放生津小学校6年生のお友達が、間作さんの物語を劇にして発表しました。

中心とした新湊汽船会社も立ち上げたのです。間作さんは、地元のことでも大切に考え、自分の利益よりも、地域産業の発展に尽くそうとしたのでした。

子どもたちの感想

新湊市立放生津小学校6年生のお友達の感想です。

間作さんは、困難なことがあってもあきらめず、一つひとつ夢を実現していつているところが、すごいと思いました。地域の発展に努めていて、とても尊敬できる人だと思いました。（宮原洋希さん）

わたしたちは、南嶋間作さんのことを劇にして、発表しました。初めは、どうしたら間作さんの生き方が伝わるのか、分からなかったけど、何回も練習を続けていくと、一生懸命すれば自然に伝わるということが分かってきました。間作さんの生き方と同じだと思います。（米田 樹さん）

劇を見た家の人から、南嶋間作さんって、いい人やねえ。あなたにもそういう人になってほしいなあ。」間作さんって、時代を見通した目をもっていて、優れた行動力があつたんだね。」と言われてました。わたしたちが伝えたかったことがちゃんと伝わっていて、とてもうれしかったです。（寺島七海さん）



間作さんの功績をたたえて建てられた、光明寺の隣地にある石碑。



間作さんのエピソード : 間作さんの突然の死は、周囲の人々をおどろかせ、悲しませました。新湊の町の人々は、間作さんのお葬式の日には漁を休み、その後1週間、音楽を聞いたり楽器を鳴らすことをやめました。

ロシア大陸を
一人で横断した

嵯峨 寿安

南嶋間作さんより20年ほど前に、海外への留学を夢見て、ロシア大陸を一人で横断した先輩がいます。東岩瀬ゆかりの嵯峨寿安さんです。

今から130年ほど前、ヨーロッパへ行くには、船でインド洋を渡る旅が一般的でした。

しかし、それでは費用がかかりすぎるので、寿安さんは、別の方法を考え出しました。

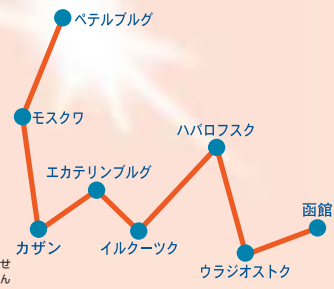
函館から船に乗ってウラジオストクへ上陸し、ロシアの大地を横断する方法です。

とはいえ、それまでロシアを横断した日本人はいませんでした。途中のシベリアには狼がいるし、冬はマイナス40度以下になるのです。

どんな困難や危険が待ち受けているか分からない冒険でした。

それでも、寿安さんは、留学の夢をあきらめきれませんでした。計画通り、函館から船でウラジオストクへ渡り、ウラジオストクから、馬車、そり、川蒸気船などを乗り継いで、8か月以上もかけて、目的地のペテルブルグにたどり着きました。

寿安さんはロシアの吹雪に負けないほどの情熱で、留学の夢を果たしたのです。



日本の将来のために

間作さんの事業は軌道にのり、ますます広がっていききました。

事業が大きくなるにつれて、間作さんは、立派な船乗りが足りないという問題を抱えました。

物資を安全に早く目的地へ届けるには、汽船のことに詳しく、船を自由自在にあやつれる優秀な船乗りが、どうしても必要だったのです。

「海で囲まれた日本が発展していくためには、船による貿易を、ますます盛んにしていかなければならない。そのために、商船学校を設立し、すぐれた船乗りを育てよう!」

そう決意した間作さんは、あちこちの船主組合や事業家に働きかけました。しかし、はじめのうちは反対する意見がほとんどでした。

「そんな、とほつもない。何も、わざわざここに商船学校をつくらなくても…」

「島国日本の繁栄は、海運業にかかっている。そして、海運業を支えるのは船乗りだ。ここ新湊に商船学校をつくり、すぐれた船乗りを全国各地へ送り出すのではないか!」

そう力説する間作さんの情熱は、だんだん人々に伝わっていききました。そして、1899(明治32)年にいよいよ商船学校が開校したのです。

このように、間作さんは、ふるさとのため、日本海側の貿易の発展のために、力を尽くしました。35年という短い一生でしたが、大きな仕事を立派に成しとげたのです。



新湊市立放生津小学校の会議室には、歴代の校長先生の写真が飾ってあります。校長先生だった間作さんの写真もあります。

大型汽船をいろんな港に寄るようにしたアイデアがすごいと思うな。

間作さんは、地域の発展を大切に考えていたのですね。

間作さんのおかげで、現在も、富山県と中国の貿易はさかんです。



間作さんは、ふるさとの商業の発展に尽くしました。次のページで紹介する吉田忠雄さんは、アルミ工業を通じて、富山の産業の発展に大きな影響を与えました。